

「おおむね満足できる状況」を理解する

—「話すこと・聞くこと」の評価—

青山学院大学 岩崎 保

四「話すこと・聞くこと」の学習の考え方

「話すこと・聞くこと」の学習では、「聞くことの力」を育てることが重要である。「聞くこと」とは、耳から聞くだけでなく、「見ること」「味わうこと」「触れること」「嗅ぐこと」「やぶ」「知ること」「理解すること」を含めた活動ととらえることができる。「聞くこと」の活動によって自身が事象の事実や状況を受容し認識して「思い・願い」をもつことにより、「話すこと」の必要性に気づき、表現する行為となる。

つまり、「聞いたこと」に敏感な反応ができる豊かな感受性を育てる基本的な学習を経て、「話すこと」の意欲と内容が形成され、結果として「話すこと・聞くこと」のコミュニケーション能力が成立すると考える。

そこで本稿では、「話すこと・聞くこと」の教材の中で「話し方」と「何を聞くか」を含めて解説していく。

などの「問いかけ」がきっかけとなる。どんな些細なことでも児童の個別の体験として尊重し、できるだけ具体的な事柄として思い起こさせ、楽しかった・おもしろかったことを話したいという気持ちを支援していきたい。

「話すこと／言語事項」

知らせたいことを選び、はっきり、「です・ます」調で話している。

話す活動の前提として、「楽しかったこと」がいくつかある中から、「最も話したいこと」を一つ選ぶ判断力も育てたい。また、話をするときには、「。。。をはなします。」「。。。ができました。」「というように丁寧語のはっきりした語尾を使うことも、板書して確かめたうえでさせていく。丁寧語の使用は、学習場面で日常的に使い慣れるように意識させたい。

「聞くこと」

話す人を見て終わりまで静かに聞き、質問や感想を話している。

人の話は、「話し手の目や口を見ながら」「静かにして」「頷きながら」聞くことが基本的なルールであることに改めて注目させる。そのようにすると、「話の内容がよく分かること」「おもしろさや楽しさが見つけられること」「質問や感想が言えること」と合わせて「話している人が話しや

一年上巻「はつきり はなそう／みんなに しらせたい こと」(九月)で、話の順序や大事なことを考える学習の評価例

思いついたことを自然に話すことから、「なつやすみにしたこと」という意図的な話題を「みんなに しらせたいこと」として、計画的に準備をして話す方法を理解し、話す楽しさを体験する学習である。

評価の内容と考え方

「関心・意欲・態度」

夏休みの出来事をみんなに知らせることに意欲をもって取り組もうとしている。

この内容は、ここでの学習全体を支える評価である。夏休みに「見たり、聞いたり、体験したり」して心に残っていることに関心を持ち、積極的に友達に伝えようとする意欲を見ていくことである。そのためには、夏休みをいかに過ごし、「何が心に残っているか」「なぜ心に残ったのか」

すいこと」などに気づかせながら繰り返し学習していくようにし、素朴な質問を实践させたい。

これまでも、「話の聞き方」については幾度となく指導されているはずであるが、児童によっては、個別に注意したり練習させたりする必要もある。また、言葉には、普通の言葉で話しているときと、丁寧な言葉で話さなければならぬときがあることも理解させて、使い分けを意識させたい。

二年上巻「五 友だちに分かるように 話そう／あつたらいいな、こんなもの」(九月)で、大事なことをよく分かるように話したり興味をもって聞いたりする学習の評価例

冒頭の挿絵「ドラえもん」は、児童のヒーローである。超能力への憧れを土台に「あつたらいいな、こんなもの」として話す材料をおおいに発掘し、自分だけの発明・発想のおもしろさを伝える喜びを味わい、それを聞く楽しさを実感する学習である。

評価の内容と考え方

「関心・意欲・態度」

自分で考えたものについて、相手に分かるように話したり、友達とやり取りしたりしようとしている。

「ドラえもん」のビデオを見たり先生に話を聞いたりして、「あつたらいいな、こんなもの」という自分だけの発明

品を考えることに興味・関心をもつことが、学習の目的となる。また、自分の発明を友達に話し、そのおもしろさや不思議さに気づいて対話することで、「ミニ」ニケーションする喜びを知ることが学習のねらいとなる。自分の考えたことに自信をもち、その発想に驚きと賛意を感じて積極的に話し合おうとすることが学習意欲となるように、一人一人の児童の思いに着目してとらえていく。

「話すこと」

自分が考えたものについて、事柄の順序を考えながら聞き手に分かるように話している。

「あつたらいいな」と思ふものについて考えついたら、隣の友達と話し合う。そこでは、「どんなものなのか」「くわしく分かるようにすることはなにか」などを確かめ合つて、説明の順序や内容を整えていく。「あつたらいいな」と思ふもの（発明品）、「どんなものか」「こんなことができる」などについて話す順序をカードにまとめ、絵をかいておくことが聞き手に分かりやすくなることにも気づかせて、個別に支援しながら準備をさせる。このステップが児童一人一人の発表に自信を与え、聞き手に分かりやすく話すことにつながっていく。

準備ができたなら、話すときの心構えとして、「みんなに聞こえる声の大きさ」で「はつきり話す」「こど」「ていねいな

言葉をつかつて話す」「ゆっくり話す」「ことなどを板書で確かめ、話す練習をしておくことも大切である。そして、いよいよ発表となれば、「順序よく・分かりやすく」に注意して話しているかを目安に、児童の「話すこと」の実践の姿をとらえていくことになる。

「聞くこと」

話し手の考えたことを注意深く聞き、意見を出したり質問をしたりしてやり取りしている。

聞き手には、何を聞き取るかの目当てを板書しながら明確にしておく必要がある。その内容は、教科書にも例示されているが、「聞いて分らないところ」「や」「もつと知りたこと」「など質問したいこと」「いいな、すごいなと思つたこと」などの感想を話すことになる。すでに身についていることであっても、「話し手の顔を見て聞くこと」「静かに聞くこと」なども確かめたい。

「みんなに伝える」場で、児童がどのように話を受け止め、どんな発言をしているかを理解することを通して、着想の感覚や個性的な感性を知ることができる。また、聞き手の発言についても丁寧な言葉づかいに注意させていく。

「言語事項」

発表や話し合いで、丁寧な言葉と普通の言葉の違いが分かり、使い分けている。

言葉の使い分けは、「みんなに伝える」場面での児童の意識をとらえていくことになる。話し合いの中で中断させて注意することではない。発表の区切りなどで教師が気づいたときに、「話す言葉が上手に使い分けられていましたね。」と注目させていければ全体に伝わることになる。

言葉の使い分けは、「みんなに伝える」場面での児童の意識をとらえていくことになる。話し合いの中で中断させて注意することではない。発表の区切りなどで教師が気づいたときに、「話す言葉が上手に使い分けられていましたね。」と注目させていければ全体に伝わることになる。

「言語事項」

姿勢や口形に気をつけて、はつきりした発音で話している。

この項目も前の事項と同じであるが、「ゆっくり話してくれてよく分かりました」というような児童の感想に賛同したり、姿勢や口形・発音については、必要に応じて本人に個別に指導したりすることが望ましい。

四年下巻「小教材 よりよい意見にまとめよう」話し合つて決めよう（一）月）で、友達と互いの考えの相違点や共通点を理解しながら、「話し合つて決める」ために進んで話し合う方法を理解する学習の評価例

学級活動で何かを決めるときに、発言力の強い児童が一方的に発言して決めてしまつたことをよく見かける。そこで、これまでに生活の中で話し合つて「決めてきたこと」について、「よりよい意見にまとめよう」ために一人一人がどのように参加してきたかを自覚しながら、「話し合いをもっと上手に進める方法」について理解する基本となる学習である。

評価の内容と考え方

「関心・意欲・態度」

話し合いの大切さを知つて、友達の発言をよく聞いたり、決めるための発言をしたりしようとしている。

物事のあり方を決めるときには、「よく話し合うことが大切である」ことについて、児童の体験から意見を出させる。さらに、その話し合いに「進んで発言してきたか」と発問し、個々に自覚させることから始める。そのために、教材を的確に読み取つたり、指導書付属のCD-ROMを聞いたたりして、「進行係の役割」や「意見をまとめるための話し合い」のしかたなどを理解させる。

決めるために話し合つことの大切さとは、「何を決めるのか」を確かめ、より多くの仲間がさまざまに発言しながら意見を比較・調整していくことであり、自分もそこに進んで参加する意欲と実践を引き出すことである。たとえ話すことが苦手でも、話し合つことの大切さと必要性に関心をもち、参加しようとする意識をもたせることである。

「聞くこと」

自分の意見との相違点や共通点を考えて友達の発言を聞き、それを踏まえて発言している。

意見の相違点や共通点を聞き分けられることが、中学年でステップアップする学習内容である。そして、聞き分け

たことをもとに「自分の考えた意見」を意思決定して発言するという能力を身につけさせるための評価である。

そのためには、理解した能力を定着させるためのドリルが必要であり、一月の初めという時期に適切な話題を選び、五・六人の小グループで話し合いの実践をする。進行係を決め、話題を確かめ、全員が発言し、意見を整理して決める方向を定め、話題からそれないように質問したり、体験を生かした意見を出したりして、全体の意見を調整する。最後に結論をまとめ、参加者に確かめて終了となる。その後で、学級全体に話の様子や出した結論を報告することも大切である。それぞれのグループを机間指導しながら、ふだんの発言を参考にして個別に評価していく必要がある。

「話すこと」

話し合いを進める方向で発言している。

話し合い活動として最も重要な項目である。話題に対して関心が高く、自分の願いに近いほど、結論を導く発言に集中でき、方向がずれることが少ない。問題は、方向のずれた発言を互いに聞き分けて指摘し、修正する能力を育てるということである。さらには、話し合いの大切さと基本的なルールを認識させる評価なのである。

六年下巻「小教材 聞き手の心に届くように発表しよう」今、わたしは、ぼくは「一月」で、小学

の材料を整えて「初め・中・終わり」に分けて組み立てることである。

次に、このスピーチを友達に印象深く伝えるために、話し始めに「注目を引くような呼びかけ」と「話題の中心の予告」を、最後に「自分の思いや願いを込めた結びの言葉」の語りかけなどを工夫させることもひと言添えたい。

さらに、会話部分の話し方、構成の段落ことの間取り方など、朗読調にならずにできるだけ自然な語り口調を心がけるように繰り返し練習させ、個別に修正できるように支援していくことである。その努力の状況をとらえるための評価項目である。

「聞くこと」

話し手が何を、だれに、どんな思いで伝えようとしているかを聞いている。

聞き手の存在は、友人との結び付きや自分の存在価値など、話し手の認識と自信を育てるために重要である。

そこで、聞き手が共感したり疑問を感じたりする反応には、教師として聞き手の受け止め方・考え方を有効に引き出す指導・助言も必要になる。特に、「何を主張しているのか」「どんな思いを抱いているのか」については、聞き取り方として明快な目標を板書で確認しながら「話す会」を開催し、全員の参加も必要条件となろう。

校生活を振り返って思うことを、相手や場に応じた適切な構成で話す学習の評価例

卒業する自分たちを主人公にして、将来の夢、感謝の思い、忘れられない出来事、心に残る言葉などを話題にして、「初め・中・終わり」の構成を工夫したスピーチをする学習である。

評価の内容と考え方

「関心・意欲・態度」

伝えたいことを考え、それが人によく伝わるように内容をまとめて話そうとしている。

この学習の中心は、「今の自分」をしっかりと見つめ、自分の心に残る大切な事柄を見つけ出すことに関心をもつことである。そして、自分の思いを友達と共有し、今と将来に向けた心のもち方や生き方などを交流して、互いに認め励まし合おうと意欲を高めたいのである。そのために、友達によく伝わる話の内容にしあげる必要がある。

「話すこと」

小学校生活を振り返って思うことや自分の願いについて、適切に内容を組み立て、印象深く伝わるように話し方を工夫して、スピーチしている。

この学習は、まず、スピーチする内容が分かりやすく伝わるように話す中心（主張・願い）を明確にし、会話や他

終わりに

評価の実践は、「評価することの意味と機能」を熟知し、各児童の学習力の成長のために生かして使おうとする教師の情熱とアイデアの継続性にある。学習力が、一回の学習指導で児童の身につくことは決してありえない。また、児童一人の評価は、一回の評価で終わることではなく、その単元における各項目の評価を改めて総合的にまとめて一連の国語力の成長として理解する必要がある。

さらに、評価した要点は、適切に一人一人の児童に伝達し、つまずきの改善に向けて努力している姿や、できている能力をさらに高めようとしている姿に注目して励ましと助言の支援を与えることを奨めたい。

最後に、一人一人の評価結果を学級全体として総合的に見つめ、学習指導法や学習計画の改善に活用する意図をおもちいただくことにも期待したい。